Ｎ☆Ｒ

作：甲斐清和高等学校演劇部

＊＊＊＊＊

マリ：高３。一見普通そうだが、実はハチャメチャ。【征服者】

サエ：高３。沈着冷静、突っ込み役。【参謀】

キヨミ：高３。ボケ担当。マリの行動にとことん乗っていく。【レジスタンスのリーダー？】

シズコ：高３。ごく普通？の高校生。【レジスタンスのメンバー】

ニイナ：高３。ごく普通？の高校生。

＊＊＊＊＊

民衆：ナスが好きだけど、それを隠している小心者

役人１：ナスが嫌いで征服者マリに忠実

役人２：１の部下。ナスは別に嫌いじゃない

※役人１、２はキヨミとシズコが兼任（かぶせものをして顔見えなくする）

※民衆はキャストが足りない場合のみ、ニイナが兼任（衣装チェンジ）

・ごく普通の日常を伺わせるのどかなＢＧＭ

・開幕

・舞台は高校の空き教室を思わせる。いくつかおかれた机にマリ、サエがいる。キヨミは、教卓付近でスマートフォンをいじっている。サエは読書。マリは真剣に１枚のプリントに向き合っている。

・しばらくして、唐突にマリが叫びだす。

マ　リ「あーーーーーー！」

キヨミ「うわぁぁっ！！」

サ　エ「どうした？」

マ　リ「書けないの！！（キヨミと同時）」

キヨエ「詰んだ！！！（マリと同時）」

サ　エ「２人一緒に言われたら、うるさい」

キヨミ「だから！詰んだの！もう、マリちゃんのせいだからね！あー、マリモツミツミ、もうちょっとで最高点が出そうだったのに～～～！マリちゃんのせいだからね！マリちゃんが急に叫ぶから指滑っちゃったんだから！」

サ　エ「なんだ」

キヨミ「なんだ…じゃないの！５００万点越えたら、伝説のキングマリモサンダーが使えたんだから！！あーーー……、４８２万点…。さよなら、夢のキングマリモサンダー……」

サ　エ「分かった。私には理解できない価値観でキヨミが儚んでいるということが」

キヨミ「サエちゃん、マリモツミツミ知らないの？女子高生必須のスマホゲームだよ？」

サ　エ「いつもピコピコなにかやってるかと思ったら、ゲームだったんだな」

・キヨミは教卓からサエのところへ移動してきて、スマートフォンの画面を見せる。

キヨミ「ほら、これ。これを指でこうなぞって…、上から降ってくるおんなじ色のマリモをつなげると、消えるんだけど。消しきれなくて、上まで積み上がっちゃったらゲームオーバー」

サ　エ「ほうほう」

キヨミ「たくさん繋げると高得点になって、得点で新しいキャラがゲットできると、また違うステージにチャレンジできるようになるんだよね」

サ　エ「ほーう。ちょっとやってみてもいい？」

キヨミ「うん、いいけど。最初のうちは結構難しいよ」

・キヨミはサエに自分のスマートフォンを貸す。サエはゲームをし始めると無言。キヨミは、ふと叫んだきり固

まったままのマリに目を向ける。

キヨミ「マリちゃん？だいじょーぶ？」

マ　リ「書けない…」

キヨミ「え？」

マ　リ「だから、書けないの！」

キヨミ「何が？」

マ　リ「進路希望調査よ！！」

・マリはプリントを掲げて天を仰ぐ。

キヨミ「それって、先月末に締め切りだったやつでしょ？まだ出してなかったの？」

マ　リ「う、うん…。テキトーに書いて出してたのばれちゃって、担任から将来をよーく考えて書き直すように、って言われちゃってさぁ…。将来のことなんて、まともに考えてなかったからなぁ…。テキトーに大学にでも行って…と思ってたんだけど」

キヨミ「高３らしいような、らしくないような悩みだね」

マ　リ「つうか、なんでテキトーに書いてるのばれちゃったんだろ…」

サ　エ「（画面から顔を上げずに）どうせ、学部も学科もバラバラにでも書いたんだろう」

マ　リ「え」

サ　エ「それバラバラだと、どんなに察しの悪い人でも、よほど迷っているか、テキトーに書いたかって思うだろうね」

マ　リ「そっかー。じゃあ、気を付けて書こうっと」

・マリは再びプリントに向き合い始める。キヨミはおそるおそるサエを覗き込む。

キヨミ「ていうか～、サエちゃん、それできてるの？」

サ　エ「あ、終わった」

・サエがキヨミにスマートフォンを返す。

キヨエ「ね～、難しいでしょ～。どんどん上から降ってくる速度速くなるしさぁ～。って！！なにこれ！！！７３０万点！！」

サ　エ「案外ちょろいな」

キヨミ「やだ！なんなの！！この演劇的お約束みたいな展開！！！あ～～～、でも、愛しのキングマリモサンダーゲット～～～♪あ！！さらに、７００万点オーバーじゃない！！スーパーマリモゴールドもゲット～～～～！！･･････複雑な気分だけど、まぁ、いっかぁ」

サ　エ「キヨミはお気楽だな」

キヨミ「はぁ、それにしても進路希望かぁ。私も結構いいかげんに書いて出しちゃったなぁ」

サ　エ「そうなの」

キヨミ「だってさぁ、将来何になりたいとか、これやりたいとか考えてもさぁ、世の中の８割の人はサラリーマンになっていくわけでしょ～。じゃあ、どこか自分のレベルに合った大学にでも行って、ふつーのＯＬやって…っていう未来しか見えないし」

サ　エ「キヨミはボケているようで･･･、意外とモノが見えてるな」

キヨミ「ボケてるは余計！（間）それにしても、あっついねぇ（パタパタ）」

サ　エ「まぁ、もうすぐ本格的に夏が来るからな」

キヨミ「最近夏がますます暑い気がする…」

・相変わらずマリは進路希望のプリントに向き合い、サエとキヨミはまったり気味。そこへ、シズコ登場。

シズコ「あ、ほぼ揃ってるね」

キヨミ「あ、しずちゃん」

サ　エ「シズコ、ニイナは？」

シズコ「あれ、先に教室出てたけど…。職員室にでも寄ってるのかな。まぁ、そのうちくるでしょ。それより、何の話してたの？キヨミの叫び声けっこう先からも聞こえたよ？」

キヨミ「え」

シズコ「スーパーマリモゴールドげっと～～～～！って」

キヨミ「うわ」

サ　エ「興奮しすぎ」

キヨミ「あーーー、マリモツミツミはとりあえず、いいからぁ。あのね、サエちゃんと、夏だね、暑いねって話しててさぁ」

シズコ「あー、確かに最近また気温上がったよね。お、でもいい風が…」

・３人はそよかぜを感じるような様子。しばらく心地よい沈黙。

シズコ「夏といえばさぁ…、夏野菜だよね」

サ　エ「突然だな」

・マリがシズコの言葉に反応を見せる。それに気づかずに、シズコは話を続ける。

シズコ「えー、だって、暑くなるといろんな野菜出てくるじゃない。私、夏野菜とか超好き」

キヨミ「夏野菜、好きってあんまり聞いたことないけど」

シズコ「なんか、夏になると競ったようにモリモリ出てくるじゃない。そうすると、無性に食べたくなるっていうか…」

キヨミ「ふうん」

シズコ「なんか、話してたらつば出てきた…。食べたいねぇ…」

サ　エ「夏野菜って言ってもいろいろあるけど、特に何が好きなの？」

シズコ「えー、やっぱりーーー、ナ…」

・突然マリがガタッと立ち上がる。他の３人は驚き、動きを止める。

シズコ「（しばらくして）マリ、どうしたの？」

マ　リ「な、なんでもない（座る）」

・首をかしげつつも元の話題に戻る３人。

キヨミ「私、野菜はなんでも好きだなぁ。あ、でも、ニンジンがいいなぁ！あの、火を通したら甘くなるとこが特に！」

サ　エ「それ、夏野菜じゃない」

シズコ「まぁ、まぁ。私はやっぱり、ナ…」

マ　リ「あーーーーーーーーーーーー」

・シズコの言葉をさえぎるようにマリが声を発する。３人はまた驚く。

キヨミ「マリちゃん？？」

・サエは何かを察した様子で、立ち上がるとマリの背後から羽交い絞めにして口をふさぐ。マリはふがふが。

サ　エ「シズコ！さぁ、あなたの好きな夏野菜はなに？」

シズコ「え、あ、あ？」

キヨミ「サエちゃん？」

サ　エ「シズコ！！今のうちに！！！さぁ、あなたの好きな夏野菜は！」

シズコ「（サエの勢いに押されて）あ、うん、ナスだけど」

・シズコの宣言にサエはニヤリ。マリは動きを止めて天を仰ぐ。

キヨミ「ナスなんだ～！私も大好きだなぁ！！」

マ　リ「やめて！！！」

シズコ「マリ？」

キヨミ「マリちゃん？」

・マリはサエを振りほどき、叫ぶとシズコとキヨミの前へと出てくる。

マ　リ「あたしの前で、その醜悪な存在の名前を言わないで！」

キヨミ「しゅーあく」

シズコ「え、ちょっと待ってよ。醜悪な存在って、ナス…」

マ　リ「シャラーーーーーーップ！！！」

サ　エ「なぜ英語」

・しばらく一同沈黙。少しして、マリが意を決したように言う。

マ　リ「嫌いなの」

シズコ「え」

マ　リ「ううん、嫌いなんて言葉じゃ足りない。…憎いの」

シズコ「えーと、ナ（マリにキッとにらみつけられて）…じゃなくて、ナのつく野菜が？」

マ　リ「そう！ナで始まる醜悪な存在の物体が！！」

サ　エ「物体…」

マ　リ「だって！あんなもの、食べ物なわけない！」

キヨミ「おいしいのに～」

・マリはキヨミをにらみつける、キヨミは大げさに「サエちゃん、こわ～い」とか言いながらサエの後ろへ。

サ　エ「初耳だけど。マリ、嫌いな食べ物はパクチーって言ってなかった？」

マ　リ「だって、その名前を口にするのもおぞましいんだもの…。言葉にしたが最後、呪われるにきまってる」

シズコ「な、なんで、そこまで嫌いなの」

マ　リ「（間）物心ついたときには憎かったわ…。きっと、あたしは前世であいつが原因で死んだにちがいないのよ」

シズコ「前世…って」

マ　リ「じゃなかったら、見るのも、聞くのも嫌だなんて理由の説明にならないじゃない。当然触るなんて無理だし」

サ　エ「そこまで嫌い…いや、憎いとは…」

キヨミ「じゃあ、マリちゃん、食べたことないの？」

マ　リ「記憶にございません」

・一同沈黙。マリ以外の３人は半ばあきれたような雰囲気。

マ　リ「･･････ごめん。あたし、このことに関してはちょっと冷静でいられないの」

シズコ「う、ううん。いや、私もごめんね。なんか、うん」

キヨミ「えーーー、でも、おいしいのになぁ」

シズコ「キヨミ！空気を読みなさい！！今、この話題、終わろうとしてたとこでしょ！」

サ　エ「そもそも、なにがそんなに嫌いなんだ？食べたことないなら、味だってわからないだろうし。味なんてないしな。アレの料理は味付けの問題だけだ」

シズコ「サエまで！」

マ　リ「じゃあ、なんでそんな味のないものを美味しいって食べてるのよ。味付けの問題だけだったら、ほかの食材でもいいじゃない」

キヨミ「（無邪気に）えー、だって、美味しいもん。あの食感がたまらないー。キヨミ、ナス食べれなくなったらヤだなぁ」

・ナスと発言したキヨミをマリがキッとにらみつける。

シズコ「（あわてて）キヨミ！余計なこと言わないの！まぁまぁ、マリも落ち着いて。キヨミも悪気があるわけじゃないし」

マ　リ「わかってる。悪気があるんだったら、友だちやってない」

シズコ「う、うん。ならいいんだけど」

マ　リ「自分でもおかしいと思ってる。でもね、理屈じゃ説明できない嫌悪感！何もかもが許せないの、あの色、あのツヤ、あのヘタにあるまるでトラップのようなトゲ。だいたい外見があんな色なのに、切ったら気持ち悪い真っ白ってどういうことなのーーー！しかも火を通したらちょっとふにゃっとなってなんか緑っぽくなってるし、気持ち悪いーーーー！！･･････あぁっ、全身鳥肌がっ」

サ　エ「気持ち悪いと２回も言ってる。なんか、ここまでくるとおもしろいな」

シズコ「サエ！」

キヨミ「でもさぁ、見た目の色が嫌いってことは、ああいう紫っぽくて黒っぽいものが全部駄目ってこと～？（間）ブドウとか？」

マ　リ「（あっけらかんと）ブドウは超好き」

・一同沈黙。ちょっと時が止まる感じ。

サ　エ「うーん、まぁとにかく、色、ツヤなど以下略その他が奇跡的な組み合わせとなって、マリにとっては醜悪なものになっているんだな」

シズコ「じゃあ、マリ、夏はちょっと、ううん、だいぶ嫌だね」

マ　リ「ホント。今は誰かが余計な努力をしてくれちゃって、１年中見かけるようになったけど、本当に夏は地獄。かなりの確率で入ってるからカレーと天丼はあたしの中では最初からアウトだし。油断するとテレビやら本屋やらでも見かけるし。とにかく、なるべく遭遇しないように細心の注意を払ってるけど」

キヨミ「なんか、すごい、努力の話だけど、なんか変」

サ　エ「でも、どうしても遭遇してしまったときはどうするんだ？」

・マリは沈黙していたが、ようやく話す。

マ　リ「存在しない世界に行きたい」

・マリはもとの席に戻り、進路希望表を手にして、じっくりと見つめる。そのようすを見つめる３人。

マ　リ「（さわやかに）あたし、本当は将来の夢、あるんだ」

シズコ「な、なんなの？」

マ　リ「世界征服」

シズコ「え！？」

マ　リ「そして、あいつのいない世界を作る！」

シズコ「えええ！」

マ　リ「あたし、本気だから」

シズコ「ちょっと、マリ何言ってるの！たかがナスだよ！（マリににらみ付けられて）いや、ナのつく物体だよ！たかがそれくらいのものに、本気って」

サ　エ「マリが本気なのはわかった」

シズコ「サエ！？」

サ　エ「だが、ただ本気なだけでは、私の気持ちは動かないぞ」

シズコ「サエ、何言ってるの？だから、たかがナスだよ？」

・ナス言ったシズコをマリはにらみつけ、シズコはおびえる。

・マリは鞄の中をゴソゴソとさぐり、財布を取り出す。そこから１枚の紙切れを取り出すとサエに渡す。

サ　エ「これは！」

キヨミ「なに、なに？」

マ　リ「もう、ずっと考えていたの。世界征服には何が必要かって。世界の前に、日本を征服。それに必要なものは…、金よ。」

シズコ「お金」

マ　リ「そう、そのためにあたしはロトロト１１を買い続けているの…」

シズコ「ロトロト１１」

マ　リ「そう、今キャリーオーバーが続いていて３０億円よ。それを元手にまずは、２５歳で衆議院議員選挙に出馬する。そして、金の力で当選し、金の力で一気に総理大臣に上り詰めるの！」

シズコ「マリ！？」

サ　エ「思いっきり、選挙違反と汚職だな。まぁ、なってしまえば…というとこか」

キヨミ「マリちゃん、ロトロトそんなに簡単に当らないよ？っていうか、高校生がロトロト買っていいの？」

サ　エ「法的には規制されていないな。まぁ、道徳的観点で販売していない県もあるようだが」

キヨミ「サエちゃん、なんでそんなこと知ってるの～」

マ　リ「当たらないのなんか、分かってる。でも、それでもあきらめきれないの。だって、この先テキトーな大学へ行って、テキトーな職に就いたって、お給料なんてたかが知れてるじゃない。一般的な生涯賃金は２億円くらいでしょ。そんなんじゃ、世界征服には足りないし、何よりもおばあちゃんになっちゃう。それまで、あいつと戦い続けなきゃいけないなんて…」

サ　エ「だから、ロトロト１１か。じゃあ、もし総理大臣になったら、どうするんだ」

・場面は突然転換。【もしも】な場面。

・教卓は演説台になり、机その他は国会の議員席のように。マリは総理大臣風に演説を始める。

マ　リ「この法案は、みなさんの健康と安全と安心の暮らしのために、作られたものであり、決して私情によるものではありません！この日本からあの、呪いの物体をなくすことで、必ずや全国民に心穏やかな安心の暮らしが来ることをお約束いたします！」

シズコ「じゃあ、ナスが好きな人たちの暮らしはどうなるんだ！」

キヨミ「そうだ！そうだ！」

サ　エ「お静かに」

マ　リ「わたくしは、わたくしは、信じております！！この法案によってあの呪いの物体の生産・輸入・販売を禁止することで、これまでにはない穏やかな生活を手に入れる。国民のみなさまのご理解を頂けるものと、固く信じております！」

サ　エ「では、採決を取ります」

・しばらくして

サ　エ「賛成３９３。反対８２。（間）賛成多数により、本法案は可決いたしました」

シズコ「なぜだ！！なぜ、こんな【ナス生産・輸入・販売禁止法案】が通るというんだ！」

キヨミ「もう、ナスが食べられないなんて…」

マ　リ「（悪そうに）ふふふ、金の力は偉大なのだよ…」

・マリはサエを従え上手へ去っていく…ようで実は、場面は元の教室へ。

シズコ「めっちゃ汚職満々じゃー！！！」

キヨミ「そーだそーだー」

シズコ「それに！なんでサエはさりげなくマリ側にいるのよ！」

サ　エ「私もナス嫌いだし」

シズコ「そ、うなの？」

サ　エ「ええ」

マ　リ「よし、じゃあ、あたしが世界征服するときには、サエは参謀ね」

サ　エ「了解」

マ　リ「あたしの治める世界では、あの憎き物体を嫌いな者は出世できるのよ」

シズコ「（あわてて）ちょっと！ちょっと待って！！」

マ　リ「なによ」

シズコ「ほ、本気なの…？本気で世界征服をたくらんでいるの？」

マ　リ「……本気だって言ったら？」

・しばらく黙して見つめ合うマリとシズコ。すると、キヨミがシズコの前へ。

キヨミ「たたかうよ」

シズコ「キヨミ！？」

マ　リ「キヨミ」

キヨミ「マリちゃんの好き嫌いで、自分の好きなもの食べられなくなるなんて嫌だもん」

シズコ「…そうよね、そうね。そうよ！そんなことで民主主義が踏みにじられるなんて！」

マ　リ「…そう、友だちとして親しく付き合ってきたけど…、あの憎き物体を好むようなあなたたちとは、どうやら相容れないようね」

・ＢＧＭ，暗転

サ　エ「（ナレーション）こうして、マリとサエ、そして、キヨミとシズコは敵対しあう関係となったのだった。そして時は流れ･･･、総理大臣となり日本からナスを撲滅したマリは、資産運用を繰り返し、着実に政治資金をふやしつつ、ナス撲滅の活動を世界へと広げていくのだった」

・明るくなるとどこかの街のような雰囲気。

・キヨミとシズコが道行く人々にビラを配っている（そぶり）。

キヨミ「私たちの活動にご協力ください！」

シズコ「このままナスが食べられなくなってもいいのですか！」

・キヨミ、シズコはビラを受け取ってもらえずに、がっくりする。そこへひとりまた通りかかる（ニイナ）。

・シズコはニイナを捕まえて、ビラを渡そうとする。

シズコ「わたしたちは、ナスが自由に食べられるための動をしています！どうぞご支援ください！」

民　衆「や、やめてくれよ！あんたたちの仲間だとは思われたくないんだよ！」

キヨミ「本当にいいんですか！あなたはナスが食べたくないんですか？」

民　衆「いや、ナスは好きだけどさぁ･･･。そんなこと知れたらもうこの世界じゃ爪弾きさ。今は、みんな経歴書にナスが嫌いだと嘘でも書いて出すご時世。ナス嫌いじゃないと、出世もできやしない。だから私もナスは嫌いだと書いてお役所に出しているよ。まぁ、正直夏になると、あーナス食べたいなぁーって思うけどね」

シズコ「だったら、ともに戦いましょう！」

民　衆「やめてくれ、まだ私も命が惜しいよ。心の中では応援するけど、協力はできないね。じゃ、そういうことだから！」

・去っていく民衆。キヨミとシズコはふたたびがっくり。

キヨミ「あのときマリが言ってた通りになってる」

シズコ「ナス嫌いは出世できる、か。マリがこれほどまで本気だったなんて」

キヨミ「ここまで人々に浸透してきてるってことは、キヨミたちもこんなふうに表だって活動するのは危険かな」

シズコ「そうかも知れない。･･････私たちのようにナスをこよなく愛する人たちには生きづらくなっちゃったね」

キヨミ「でも、キヨミは負けない。ナス好きな人たちが隠れてこっそりと食べる世の中なんて間違ってる」

シズコ「･･･うん、そうだね」

・キヨミとシズコは再びビラを配るそぶりをしながら上手へ去っていく。下手からはマリとサエが登場。

マ　リ「だいぶ、あたしの望みが叶ってきたわ！」

サ　エ「そうだな。かなり、私たちの考えが浸透してきたように思う」

マ　リ「活動費は大丈夫？」

サ　エ「私に任せておけば大丈夫だ。順調に資産を増やし続けている」

マ　リ「サエは頼りになるわね」

サ　エ「まぁな」

マ　リ「それにしても、あの憎き物体をほとんど見かけることはなくなったけれど、未だに完全に絶やせないのはなぜなのかしら」

サ　エ「根強いファンがいるからだろう。表だって生産・販売できないためだろうが、人も入らないような奥地で秘密裏に栽培されていたりすると聞く。また、闇市では１本１０万円の高値でやりとりされているとも聞く。そこまでしても食べたいという人がいるのだよ」

マ　リ「どうやったら根絶やしにできるのかしらね･･･」

・サエは考え込む仕草。しばらく沈黙。

マ　リ「サエ？」

サ　エ「マリ、ここまですればもう十分じゃないか？マリの視界にその憎き物体は入ることがなくなったろう？これ以上は、いらない反発を招く。圧力の強い権力に、すべての人が屈するということは、長い歴史をみてもありえない」

マ　リ「サエ、何を言っているの」

サ　エ「すべてのひとがあきらめてしまうことはない、ということは、そのあきらめない誰かがマリを脅かしつづけるということだ」

マ　リ「それは･･･、キヨミやシズコのこと･･･？」

サ　エ「特定の誰かを指したつもりはない。でも、マリがそう思うということは、マリの中にキヨミやシズコのことが常にあるからだろう？」

マ　リ「そ、んなこと･･･ない･･･」

・マリは長く沈黙する。サエが真剣なまなざしで見つめ続ける。

マ　リ「でも･･･、ずっと･･･、決めてたから･･･。それがあたしの信念だから」

サ　エ「マリ･･･。わかった･･･。マリが、そこまで決めているなら、私はどこまでも共に行こう」

・サエの言葉にマリはうなずくと、上手へと去っていく。サエも追いかけるが、ふと途中で足を止める。

サ　エ「マリ、あなたというひとは･･･」

・サエが上手へとはける。

・下手から民衆と役人１（キヨミ）、役人２（シズコ）登場。民衆は役人１に引きずられるようにして舞台中央へ。

民　衆「おっ、お役人様！こ、これは何かの間違いですっ」

役人１「うるさい！！容疑は固まってるんだ！！おまえが声高にナスを好きだと言っていたことは調べがついてる！」

民　衆「い、いえ、決してそんなことはっ」

役人１「おまえ、隠れナス好きなんだろう？？？」

民　衆「い、いえ、私はもう、普段からナ、ナスが大嫌いで･･･」

役人１「そうか。（役人２へ向けて）おい！」

役人２「はっ」

役人１「準備しろ」

役人２「はっ」

・役人２は【踏みナス】の準備をはじめる。

役人１「あの方は、この世界からナスも、ナスが好きだという者も、そしてナスという言葉すら消滅させたいのだ」

民　衆「い、いったい何を･･･」

役人２「準備できました」

役人１「よし、踏め」

民　衆「こ、これは･･･。なんて、美味しそうなんだ！ツヤといい、形といい、一目で最高級とわかる･･･！」

役人１「ナスが嫌いだというなら･･･、ためらいなく踏めるよな？」

民　衆「も、もちろんですっ」

・民衆はためらい、焦る。そして、しばらく葛藤をしたのちに、ナスを踏む決心をする。

・足を掲げて踏もうとする瞬間にＳＳ。しばらく停止。

民　衆「･･･できない、私にはできない！！」

・照明戻る。

民　衆「踏めない！私にはどうしても踏むことができない！なぜ、こんなに美味しそうなのに踏みつぶさなければならないというんだーーーー！！！（足下のナスに倒れ伏す）」

役人１「ナス好き確定だな」

・暗転

サ　エ「（ナレーション）さらに時は流れ、世界のほとんどをその手中におさめたマリであったが、キヨミやシズコを中心とするレジスタンスの活動により、世界征服、そして世界からナスを撲滅するという目的をまだ達成することができずにいたのだった」

・明るくなるとともに、ゲリラ戦の様相（ＳＥも）

机や椅子はバリケードに、ほうきなどは武器に。シズコはバリケード越しに銃（ほうき）を撃つ。背後のバリ

ケードにはキヨミの姿。

シズコ「くっ、駄目だわ！敵が多すぎる！！」

キヨミ「しずちゃん、泣き言言わないのーー！あきらめたら、駄目なんだよーーー」

シズコ「そうよね！」

キヨミ「そうだよ！キヨミたちがあきらめたら、誰が自由にナスを食べられる世界を取り戻せるっていうの！あきらめたらそこで試合終了って、なんかの先生言ってた」

シズコ「そうだね、私もその言葉知ってる。うん、あきらめない！私たちの食生活の自由を守っていくために！！」

・上手からマリとサエが登場。セリフはないが、キヨミとシズコはサイレントで戦いを続ける。

マ　リ「はーはっはっはっ、無駄無駄無駄無駄よ～～～。みんな、あたしの前にひざまずくのよ～～～。（サエを振り返って）サエ、首尾はどうなの」

サ　エ「上々だ。レジスタンスの活動は徐々に下火になっている。さらに各地で行っている踏みナスにより、隠れナス好きを次々と摘発し、数十万人を捕らえている。これからさらに拡大していく予定だ」

マ　リ「よし、サエに任せておけば安心ね。でも、あの憎き物体の名前をあたしの前で口にしないでちょうだい。サエだから許すけど、サエじゃなかったらただじゃおかないところよ」

サ　エ「気を付ける」

マ　リ「しかし、キヨミやシズコたちは粘るわね…。早くあきらめればいい。そうすれば、昔のよしみで特別に許してあげるのに」

サ　エ「キヨミやシズコにも、譲れないものがあるのさ。マリ、あなたと同じように」

マ　リ「サエ…」

・うつむくマリ。

マ　リ「サエ、サエはあたしから離れないよね。ずっとついてきてくれるよね」

サ　エ「非情になりきれないところがマリの長所であり短所だな」

・再び銃撃戦の音が激しくなる。サエはマリの前に出てかばうような様子。

サ　エ「ここは、危ないかもしれない。マリ、下がろう」

・サエとマリは上手へはける。再びレジスタンス側へ。

シズコ「キヨミ、このままじゃ形成不利よ！仲間たちもどんどんやられてしまっている！どうするの！？」

キヨミ「こうなったら…、桶狭間作戦しかない」

シズコ「桶狭間作戦？」

キヨミ「織田信長が今川義元を破った戦い。２千の兵で４万の今川軍を蹴散らしたの…」

シズコ「どうやって？」

キヨミ「大勢力を一気に叩くには、そのリーダーを倒すしかないの」

シズコ「…ということは、マリを？でも…」

キヨミ「自由を取り戻すという目的のためには、結局最後はマリちゃんと戦うことになってしまうのよ…。遅かれ早かれってことよ…」

シズコ「（ためらう）でも、マリは…。それにサエも…」

キヨミ「分かってるよ！でも、あのとき決めたじゃないの！キヨミたちは、民主主義を守るって、いいえ、ナスを自由に食べられる世界を取り戻すんだって！こんなナスを世の中から亡きものにするためだけに世界を手に入れたマリちゃんは、もうキヨミたちの知ってるマリちゃんじゃないんだよ！」

シズコ「うん…、分かってるよ…。でもっ」

キヨミ「しずちゃんがためらう気持ちもわかるけど、今は私情を挟んでられない。しずちゃんがやる気ないなら、キヨミだけでもやるよ」

・キヨミは武器（ほうき）を持ったまま下手へはけていく。シズコは「キヨミ！」というが、すぐには動けない。

　しばらくためらい、ようやくキヨミの後を追う。

・再びマリとサエが上手に登場。遠くに銃撃の音。

サ　エ「今日はいつになく抵抗が激しいようだ。捨て身に近いのかもな」

マ　リ「……」

サ　エ「マリ？」

マ　リ「なんでもない」

・マリが言うと同時にキヨミが下手から飛び込んでくる。

キヨミ「マリちゃん！サエちゃん！」

マ　リ「（驚いて）キヨミ！？」

キヨミ「キヨミたちは、マリちゃんの手から自由を取り戻すよ」

マ　リ「どうしてそこまで…」

キヨミ「だって･･･、ナスが大好きだから･･･。それに…」

・しばらく沈黙。そこへシズコが下手から飛び込んでくる。

キヨミ「マリちゃんがこれ以上暴走するの見てられないの！！もう、やめてよ！！」

シズコ「キヨミ…」

・沈黙。しばらくしてマリが口を開く。

マ　リ「でも、あたしは、どうしてもあいつの存在を許すことができない…」

キヨミ「なら、やっぱり戦うしかないんだね」

マ　リ「･･････あのころに、戻ってやり直せたら良かったのかもね。あのとき、ロトロト１１さえ当たらなければ、あたしたち平凡なままでいられたのかもね…」

シズコ「今からでも戻れるよ！」

マ　リ「無理だよ。あたしは、もう、こんなに世界を変えてしまった…」

・マリが手にしていた武器（ほうき）をキヨミに向ける。キヨミもまた同じく。

・向き合ったまま動かないマリとキヨミ。そこへ、マリの後方に控えていたサエが突然マリを刺す。マリはうっとうめくと驚いてサエを振り返る。

キヨミ「サエ！？」

シズコ「マリ！！」

マ　リ「さ…え…？」

サ　エ「マリ、もうここまででいいだろう…」

マ　リ「サエ…、裏切ったのね…（くずれおちる）」

サ　エ「（マリを抱えながら）これ以上は無理だ。これ以上やるにはマリは優しすぎる。途中からナスを撲滅することよりも、キヨミやシズコのことばかり考えていたな」

マ　リ「そ、んなこと…」

サ　エ「誰よりもそばにいて見てきたからわかっている。私はもう辛そうなマリを見ていられない」

マ　リ「だから、うらぎって…？」

サ　エ「裏切ってなどいない。私はマリのそばを離れはしないよ」

マ　リ「さえ…」

サ　エ「だけど、謝らなきゃいけないこともある。･･･実は、私はナスが好きなんだ」

マ　リ「それでも、あたしについてきてくれたのね･･･（がくり）」

・キヨミ、シズコがマリとサエに近づいて行こうとする。それをサエが制止する。

サ　エ「来るな！」

シズコ「サエ」

サ　エ「私たちは敵対するどうしだった。それでいい。キヨミ、シズコ、あなたたちがマリを、そして、私を倒した…。それでいい。あなたたちが自分自身の手で自由を手にしたのだ。さぁ、自由にナスを食べればいい…」

・キヨミはしばらく動けずにいたが、決意した様子で近くにあった長ほうきを手にし、布をくくりつけるしぐさ。そして、机のバリケード上に登り、その棒を大きく降る。そして、振り絞るように言う。

キヨミ「イートナス！イートナス！」

シズコ「イートナス！イートナス！！」

サ　エ「ナスは英語でエッグプラントだけどな」

・劇的な革命の終わりを続けるＢＧＭがしばらく続く。それが唐突に途切れるとニイナ登場。

ニイナ「こんにっちはー。いやだぁ、職員室寄ってたら遅くなっちゃってさぁ～。先生ったら、話長い長い…ってあれ？何」

シズコ「ごらん、国民よ！今我々は自由を手にしたのだ！」

・ニイナは棒を振り続けるキヨミを見る。

ニイナ「あれ、なんだろう？なんか目に見えない旗が見える気がする…」

・まだ、余韻に浸り続ける４人の雰囲気にのまれるニイナ。しかし、我に返って。

ニイナ「だから！なにが起きてるのーーーー！！！？？？」

・４人は我に返る。

シズコ「あれ、ニイナ？」

キヨミ「あ～、ニイナちゃんいつ来たの～」

サ　エ「のめりこみすぎたか」

マ　リ「あは、途中からなんか記憶ないかんじ」

ニイナ「なに？４人で次の公演の練習でもしてたわけ？」

シズコ「いや、そうじゃないんだけどね…」

・４人は机やら何ならをガタガタと片づけ始める。ニイナもわけがわからないが、手伝いつつ会話進行。

ニイナ「もうさぁ、入ってきたらなんか世界違ってびっくりしちゃったよ」

シズコ「なんか、未来が見えたみたいな」

ニイナ「なにそれ」

キヨミ「あはははぁ～」

サ　エ「それじゃ、学園祭公演の台本でも決めるかね」

マ　リ「あ！進路希望調査書かないと」

・ＢＧＭ（終わりに向かっていきます）

・マリは進路希望調査を書くために、再び机に向かう。他の４人は次の公演の話し合いを雑談を交えつつ進める。

シズコ「それにしても、さっきのなんだったんだろうね」

キヨミ「みんなで夢でも見てたみたいだよね～」

サ　エ「そうだな」

ニイナ「なになに、ほんとになんなの？」

キヨミ「あは、ナスをめぐるありえないようなお話だよ！」

ニイナ「なす？」

サ　エ「キャリーオーバーマックスでロトロト１１が当たる確率を考えれば、まぁ、ありえないな」

・さらに話し合いを進めていく４人に対し、進路希望調査に向かっていたマリが何かを思い出したようにスマートフォンを探って調べものをする。

マ　リ「あーーー！！」

・ＢＧＭストップ。４人が一斉にマリの方を向く。

シズコ「（おそるおそる）マリ、どうしたの？」

・マリはスマートフォンの画面と小さな例の紙切れを数回見比べると言う。

マ　リ「ロトロト…当たってる」

キヨミ・サエ・シズコ「えーーー！！！？？？」

・キヨミ・サエ・シズコがマリのもとに駆け寄って、「ホントだ！」とか興奮気味に４人で会話がつづく。

・ニイナだけが事態を飲み込めずに「ロトロト？」とか言う。

・ニイナが４人のところに近付くとマリの手にあるスマートフォンを見て言う。

ニイナ「それ、先週の抽選結果じゃない？」

・一同しばらく停止。ＢＧＭ再開。

ニイナ「ほら、先週の金曜日の結果だよ。ていうか、今日木曜だし」

マ　リ「（放心）あーーー、あー、うん、そうか、そうだよね」

キヨミ「･･････ロトロトそんなに簡単に当たらないもんねー」

シズコ「そっ、そうよね、そうよ！こんなに簡単に当たるなんてあるわけないわよね！」

サ　エ「らしくもなく、取り乱してしまったな･･･」

ニイナ「でも、何でロトロトなのよ？」

キヨミ「･･････あー、当たって総理大臣で、ナスで革命で･･･」

ニイナ「ナス？そういえば、さっきもそんなこと言ってたけど･･･。あ！そうだ！！」

・ニイナは自分の荷物の方へと行き、ごそごそとさぐる。

ニイナ「今日母さんに持ってけ～って言われたんだよね。（ごそごそ）最近、うちの母さん家庭菜園にはまってて、結構たくさんとれたから（ごそごそ）、それにしても、偶然。今日ちょうどその話題出てたなんて（うきうき）」

・ナスを取り出して、満面の笑み。

ニイナ「はい、初物だって」

・ニイナがにこにことナス（大量）をみんなの目に差し出す。

マ　リ「（しばらく硬直したのち）いやーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

・叫ぶなり逃げ出すマリ。ニイナは訳がわからずにナスを持ったままマリを追う。逃げるマリに追うニイナ。他の３人も三

者三様の動き。しばらくギャーギャーと、どたばたと舞台上を駆けめぐり、全員下手へ去っていく。

・ゆっくり照明がフェードアウトする。

・ＢＧＭ大きく。

・再び照明がフェードイン（教卓）。教卓上にはナスの山。

・ＢＧＭ、照明フェードアウト。

・閉幕